

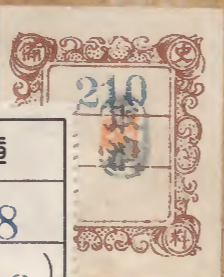
# 三家考

中

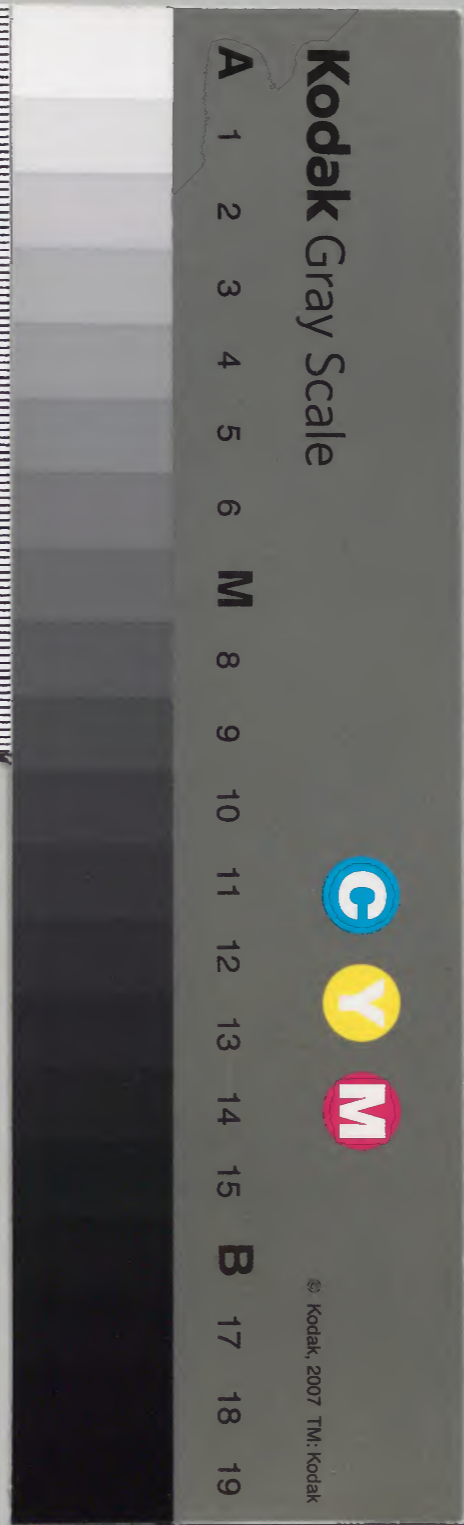
和書門			
三五四三八	號	類	
一七一函	架		
三冊			

内閣文庫	
三五四三八	和
二四九函	三冊
一八架	

内閣文庫	
番號	和 35438
冊數	3 ( 2 )
函號	149 89



共三



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

上野國新田庄城山記

城山是金山之別名先古此山新田未葉由良氏

某住居城郭周匝大凡三里半余皆其要害

故稱城山而今里人呼本城迹稱之御城斯以

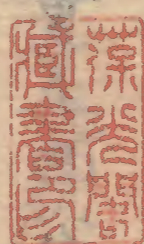
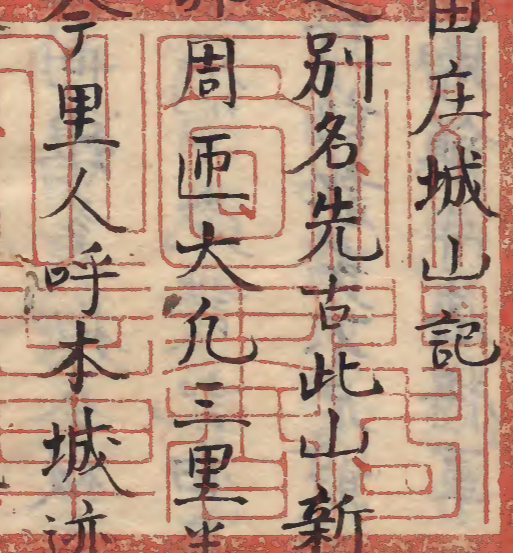
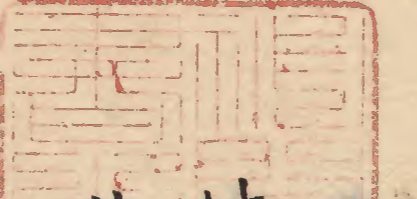
其古城下之人民懷德畏威崇城主也當時餘

夙今尚存矣或又御城作之實城其事實記

之於次下由良輩記卷上略曰夫此金山也周匝

三里余高秀五百方嵯峨嶮峻而飛鳥卒難翔

走獸恣難奔白雲恒覆峰綠霧香卷腰溪水



萬尋如藍絕頂有大小二所有池水碧波漫不巽  
異朝五湖設雖連年旱魃其水竟無渴前構利  
根大河後橫渡瀨長流東西平地而人馬馳挽兵  
糧運送頗便佳矣不劣千破釵金剛山究竟要  
害名城也云云老談記中局亦同此記就案此城  
興廢未由當世雖多秘本板本諸家雜史未見  
所載此城事迹偶々老談記由良軍說雖記天正  
年中軍事野語誤多不足取焉但或家傳秘記  
畧曰新田始祖贈鎮守府將軍義重上西公者其

其居城在郡之寺尾嫡男義兼其子義房相共兩  
代居城如故至第四代新田太郎政義時聊有所以其

以者見于東  
鑑第三十五

移居城於同郡由良其次政氏基氏朝氏迄

共三代相繼並住于由良城至第八代新田小太郎  
義貞或曰以為居城又改築由良古城於世良田  
相攸乎太田金山欲築城郭既開其基雖構門柵  
軍用多故未能經營之而止矣其後義貞公三  
男武藏守義宗嫡子貞氏幼年之比隨後醍醐  
天皇第八皇子宗良親王若宮或作親王良親王

漂浪潛居于信濃國然以鑊倉後難已忍家臣  
橫瀨近江守某密供住相州藤澤清淨光寺乃為  
第十二代他阿上人弟子名了阿弥其頃將軍遷  
城京都開東靜謐仍又近江供來都郡改宗天台  
入觸不動別當御律師懷尊室乃號吞嶺暫潛  
反町而后密卜小廬于金山東裡入幽居有年今世  
土人呼此舊跡稱吞嶺入或名殿入既而嶺公及冠  
年則又近江守強勸還俗乃配長女為聲娘子  
繼已名跡改其姓名號橫瀨新太郎貞氏新構

屋形移住金山東北坂中依之里人稱坂中殿新田  
橫瀨元祖是也爾後應永二十三年丙申冬十月  
鑊倉執事上杉右衛門佐氏憲入道禪秀遂已主君  
持氏以立其弟持仲持氏敗軍出奔駿州既而持氏  
重起大兵復入鑊倉禪秀伏討持仲自殺此時貞氏  
引卒一族家人數輩馳參持氏麾下殆有軍功錄是  
京將軍義持公為其忠賞賜新田一郡之采地不  
意而幸安堵本領於茲就祖父義貞源君昔年開基  
旧迹築成城郭假設要害斯乃金山城主創乎而后

貞氏營別館於居城以南擬諸吉野內裡南隣有實  
城寺以為國良親王幽居親王蟄居此館惟尚里人  
崇之稱實城殿爾后至今殘實城名蓋依之  
矣貞氏嗣子貞俊其次貞國今蔡相共三代  
子々相繼並為城主國蔡嫡男業蔡此時既為  
第五代城主而怖其城要害未堅固文明年中  
或藏招請太田道灌以晉議之迺命家臣今井  
左近將監蔡信使假古城悉造替之自爾後有  
金山名城之風聞也其次國經奉蔡成蔡等共

四代是亦子々相繼為城主矣

貞氏以后稱城主者至於國蔡九九代也其中四代九代  
共號國蔡同名異人但第四代橫瀨國蔡異說有  
之見于慶長日記第七局不勞記焉

然至第九代由良信濃守國蔡天正十年壬午六  
月下旬被謀北條氏直國蔡及舍弟長  
尾新五郎顯長空為擒而在相陽小田原城  
中然其老母惟雖女將殆有巴坂額武雄而與  
家臣一族等相議即催軍勢而楯籠金山  
城中引受寄手数千小田原勢強敵會戰幾度

無不乘勝箠城。凡是三年余，而竟為和談。天正十三乙酉之秋，由良長尾兄弟相伴，既飯城焉。其後兄弟共為平氏北條旗下，為防豐臣秀吉公寄來于關東，加小田原箠城軍勢。天正十七己丑，又指箠彼城，然其老母却通志於秀吉幕下，召連嫡孫由良貞薰，引卒家人三百余人，差加碓冰寄手前田利家、上杉景勝軍勢，松枝城責殆。我軍忠且自矢，相隨一族失場。烏山家臣柳井大澤根岸至小田原，拜謁秀吉公於陣中，公甚欣然。

抽  
按當作

既而天正十八庚申之秋七月，小田原落城以後，由良長尾共飯自城。翌十九年辛酉之春，豐臣秀吉譴責由良國薰去歲箠城不忠，既欲誅罰沒收其城，然感老母松枝忠戰免之，改易僅與五千石米地，而便老母及國薰，遂於常刈牛久或作潮來。爾後更無城主相繼，貞氏以來子孫歷住九代，名城自破却矣。嗚呼情哉。

己上略抄，或家秘記，但天正中，由良長尾，小田原箠城，見于北條五代記及老談記，由良軍記等，且老母之武忠，詳乎參河後風土記第二十六卷及第二十九卷。



家傳曰實者新田少將義宗之子也義貞於越之足羽戰  
死之後義宗隱于關東而多年雖追南帝之遺勅其  
功不假矣將生二子嫡子兵部大輔貞方於相列橫死焉  
其弟容辻者生越後而有故自襁褓之內左馬廂滿  
國羶之而長而号滿純應永年中舅與大懸入道  
味改号新田露本而雖龍衣鎌倉公方持氏天運未  
到歟同二十四年五月十三日於藤澤之道場傷害  
矣

凡是迄八代而滿純戰死之後離散岩松矣其  
子新田三河守家純始浪之而参于南帝焉其  
後永享十二年結城戰場之時成京方有拔  
群之忠依之自普光院殿再安堵舊領而常

住岩松亦有緯之日則新田庄之與親族家人等  
共取登此山而為亂妨之防其后弓矢盛而削石  
壁深湟墨而漸城郭成矣其男新田兵庫頭明  
純其子新田治部大輔尚純和歌連歌之達人而  
天然風雲之道遙令遊心京都之恭勤家中之執  
政諸事任長臣橫瀨雅樂助未滿半公而閑居岩松  
號梅核靜喜庵其子新田治部大輔昌純幼年而  
家督為金山城主恭勤執政又任橫瀨雅樂助昌  
純長而後惡橫瀨之勢過分事與一族普代之



相議十二月晦日年号不詳蓋明日元日為年頭之禮  
登城之刻於殿中可誅之相謀時有內通人橫瀨  
雅樂助小野奉齋大晦日夜半不意起御城逆  
寄而為燒繫于時治部太輔昌純傷害矣此時  
橫瀨欲奪新田家雖然家中羊隨羊不隨及騷動  
焉其時良田山長樂寺住僧真西堂扱之今世間  
坪弓矢之内家中兩分戰則同士討而却為隣國之  
有矣爰幸昌純之舍弟也殿為出家在當院令  
還俗之新田為大將分称屋形謂然依之橫瀨改

由良而家中唱旦那

由良家之先祖一代武藏国七黨之内丹治姓由良某家  
ヨリ為賴子橫瀨ノ嗣依之此時露其源称由良云  
又或說三其世諺沼尻小金井嶋橫瀨唱新田四天王云  
其中橫瀨別而祿厚久住由良郷故里人自始唱由  
良殿當此時橫瀨者陪臣称号而慮家中信用之可  
薄事習地名而謂改由良不知孰是事

仍為陳代渡團可受差圖忠臣之棟梁沼尻大  
膳等汲神水而味談調万字殿還俗後号新  
田治部太輔氏純金山之實城安置

金山本城謂御城此時金山谷筑後坂庭生水以為近習之長臣  
是謂屋形附之象被西家之子孫各隱其旧領地為農長  
而今同郡脇屋上田嶋ノ二郷在位

由良則居坂中金山三九謂坂中也。從是由良家勢強盛而新田家日衰。氏純却如圍人而送日遺恨之餘病氣暮四十二歲之時自殺焉。其子新田治部太補守純如亡父之時置實城之。其后由良信濃守國藝與小田原北條對陣有年。天正十四年終為扱而退去。同國桐生之郡治部太補守純迄及六代離散金山之以來為浪。後年東照宮御入國之其后依御尋而於川越始拜恩。額慶長之官記新田治部太補見之者。是守純

也。金山城元岩松家之雖為草創彼家為逆臣相。衰今世詳知之者稀矣。

新田岩松系脉

義重 新田大炊介

義兼 新田藏人

女子 岩松遠江守義純妻

時兼 岩松遠江守

義房 新田藏人太師

經兼 岩松遠江守

政經 岩松太師  
号新田下野守

經家 岩松兵部太補

直國 岩松治部太補

滿國 岩松左馬介

滿純 岩松治部太補 号新田  
美新田武藏守義宗子

持國 岩松右京大夫

家純 新田三河守

明純 新田兵庫頭

尚純 新田治部太補

昌純 同上

氏純 同上

守純 同上

豐純 同上

義純 岩松滿二郎

義元 同上

忠喬 大久保源次郎  
美沼田守右衛門子

岩松滿二郎 義純舍弟有岩松守右衛門者住同國  
沼田氏之後仕真田伊豆守云云

新田岩松家之由緒

源義家公三男上野介義國其嫡男新田大炊  
助義重新田家始祖其三男新田二郎義兼  
家讓受継其舍弟德川四郎義永子等小新  
田唱嫡男山名義範二男里見義俊大新田唱  
是等妻腹三男四男本室腹故也義兼子息  
新田太郎義房相續義房一女子一男子此女  
足利家元祖足利治部太補義康三男足利  
上總介義兼嫡男足利太郎義純又義兼不

快ニシテ家ヲ出新田ニ来、聳トナリ、時兼法名

時朝ヲ儲、是ヲ山岩松ト号ス、其始祖也。

一男子、新田太郎政義ト号シ、早世、其男新田

又太郎政氏、家督、後京都、在、各所勞ト号ス、

懈怠ニ付、没収セラル、其所領半分、徳川義季

預リ、新田総家ヲ持、故義季、新田大入道殿

ト唱フ、法名采、勇ト号、新田郷長樂寺開

基ナリ、残り半分領地、岩松遠江五郎時兼

方預ル、又義純ノ岩松  
遠江寺ト改シ故徳川岩松、両家ハ新田ノ本

家近ノ親族タル故ナリ、其後本家政氏子息新

田太郎基氏方、岩松預ル領地、不殘相返、徳河

家領ル処、十ノ物五ハ相殘、故徳川家ノ領地也

ヨリ多シトナリ、

岩松家預ル処ノ領分、本家ノ太郎基氏生

長ニ付相返スハ、岩松時兼ノ子息、岩松五郎

経兼ノ時ナリ、本家者坊ノ節ハ、各新田庄移

住、此時経兼、岩松ノ舊里ニカヘル、此経兼、徳

川義季ノ嫡男、徳川下野守頼有、聳ト

此付頼有其此男子無ヲ以テ、經兼ノ息男岩  
松太郎政経ヲ養子トシテ、新田下野守ト号ス、  
其後實子下野太郎頼泰出生ニツキ、政経ハ  
隱居シ、西谷頼賢ト號ス、

新田本家ハ、基氏ヨリ、子息二郎太郎朝氏、  
其嫡男新田小太郎義貞、二男脇屋次郎義  
助ナリ、

政経入道頼賢ノ子ヲ、岩松兵部太輔経家ト  
言フ、太平記ニ岩松二郎左衛門経家トアリ、義

貞方ニテ、女影原ニテ討死、其子岩松兵部太  
輔直國ハ、尊氏將軍ノ味方ニ参リ、岩松家ヲ  
立メリ、直國ノ弟ヲ、岩松禪師頼宥ト号ス、  
渠モ尊氏ハ属ス、此直國ノ時、新田本家義  
貞断絶セシ跡、新田郡五六万石ノ所ヲ拜領  
シ、大身トナル、岩松ハ千石計ノ所ナリシカ、義  
貞ノ断絶ニ大ニ利ト成、此儀ハ世良田ノ城代  
新田四郎、後上野今ト号ス、渠ハ義貞ノ又伯  
父ナカラ、當城ヲ預居ル、足利方ヨリ神寄セ

攻付ルト言エトモ防戦稠ク鎧倉基氏御ヨ  
リ救之玉フ御禮トシテ一子火王九十三歳  
成シテ進上御頼申已討死基氏火王ヲ  
不便シ元服サセ新田四郎義一ト名ノラセ  
義貞ノ一跡ヲ與エラル然武州小手指原ノ  
合戦義一廿一歳ニテ討死ス此時ノ合戦ニ  
岩松直国基氏ノ難儀ニ代リ力戦ス從臣  
金谷新左衛門討死此功ニ依テ義一カ一跡ヲ  
基氏ヨリ直国ニ賜ル是義貞ノ舊領ナリ

故新左衛門子金谷新十郎從族ノ徒ノ上  
座ナリ

直國子岩松左馬助滿國家督ス滿國カ妹女  
義貞ノ三男義宗ノ室ト成越後ニ赴ク二子  
ヲ産ム兄ハ新田兵部太捕貞方ト云或ハ義  
道トモ云フ漂流潜行付テ新田入道克慶  
ト號ス相州底倉ニテ討死ス弟容辻ト号ス  
母氏方ノ伯父ナレハ岩松滿國カ方ニ兼ヒ隱  
シ後其家ヲ繼キ岩松治部太捕滿純ト号

其後木氏ヲ顯セテ、新田ニ改稱ス。大掛入道  
上杉禪秀カ謀及ニ一味シ討死ス。

満純子家純浪々シ、結城亂ニ將軍ノ味方ニ  
忝リ軍功故普光院義教公ヨリ御取立本  
領安堵シ新田三河守ト号ス。

是ヨリ以來、岩松ノ新田家上州新田庄金山城ニ在位  
家臣横瀬カタメニ段々衰微此ノ訣ハ前書ニ著述ス  
ル処ナリ此未引付ケ見ヘシ

岩松家最初ノ領地ハ猪沼郷ト言テ三町五  
反ノ處ナリ、岩清水ノ八幡ヲ勧請申置其所

松アル故ニ岩松ト唱フ。  
元祖義重公寺尾城ヨリノ隱居所岩松ナリ、其  
所ヲ足利ヨリ來ル義純ニ義重ノ嫡女ヲ娶  
ラセ、岩松ト稱セシム。

義重公廟所、右猪沼郷ノ松ヲ驗トスト言、大光  
院ノ寺ヲ義重山新田寺ト号シ、大光院ハ義  
重ノ院号ニテ、墓所ノ処ナリト申習ハ誤  
ナリ、當寺遙ニ以後造立ナリ、義重公ノ大  
光料ト言フ事アリ、是ヲ以言來ルカ、義重

公六、禪師采西ノ法弟ニシテ、上西ト申ス事  
明ラカナリ、禪宗ニテ、浄土宗ニ非ス、義重ハ  
右大将頼朝公時代ニ早老年ナリ、法然頼  
家郷ノ時ヨリ、法ヲ興ス、

徳川義季公ノ廟所ハ長樂寺ニアリ、此寺ハ  
建仁寺開基ノ采西弟子榮朝開基ニテ、  
義重入道上西ニモ采西門弟、故ニ當地禪

室建立ス、

案ルニ長樂寺ヲ世良田ノ地ニ建ハ當所義季  
領地ニ付菩提所也

岩松ノ元祖義重ノ嫡女ナリ、義純ノ室ナリ、

來王御前ト号ス女中ニテ、此家ヲ立將軍  
家御下文アリ、仁安建保ノ比ナリ、

義重ヨリ岩松家ノ讓狀

女塚<sup>ヲナシ</sup>押切世良田上下ノ平塚ニ次也、

是來王御前ノ領分高ナリ、其男時兼妻  
ハ下總ノ相馬能胤ノ女也、故ニ相馬ヨリ、彼女  
ニ添物ノ領地アリ、野毛布施等ナリ、又  
時兼ノ嫡男経兼徳川頼有聲ニ付、頼有  
新田本家没収ノ時、本家ヲ預リ、看坊致



サレ、新田下野守ト名乗ト言ハシモ、男子無ニ付、  
此經兼ヲ、娘子トシテ、新田下野守ト呼セシ  
處ニ、賴有實子出生ニ付、岩松へ飯リ、西谷賴  
賢ト号入道セリ、依之者坊賴有ヨリ、重テ  
讓狀アリ、  
女塚 江田 上下田中 大館 糟川 小住押  
切 井出塚 世良田 三次 上下 今井 上下  
平塚 木崎町 フキニ 郷 燒沼  
此郷次第讓渡ス相違不可有、仁安三年六

月日早天、經兼讓狀ヲ以後、家地双職タルハシ  
ト云云、

又德川ノ本領ハ上野国新田庄内、德川郷横  
瀬郷下江田邑也、并但馬内上三沼庄、東方西  
方相摸内永用郡、但此兩所ハ軍切ニテ領シタ  
ル處ナリ、右永用郷ハ女子源氏ニ讓賜フ、娘子  
龜王丸ニ讓處ナリ、龜王丸女子源氏ノコトヨ  
クタル間、娘子トシ、嫡子ト立テ、讓リ渡スルハ源  
ノ賴有ト一紙アリ、

シヨクノ三字  
本書ノマ

女子源氏ハ頼有ノ息女ニテ、經兼ノ室ナリ、龜王丸ハ政経ノ事ナリ、

如此ノ訣ニテ、岩松家ハ妻女ニテ、領地多ク成タリ、

岩松新田ノ末庶流ヲ山伏トシテ、新田ニ住ス是横瀬ニ浸略セラレ、微少ニナリシカハ、所領王無キ故ナリ、花頂院、千壽院等ナリ、千壽院ハ岩松治部太輔ノ舍弟、西谷右衛門大夫ノ二男、今ノ右衛門大夫ノ弟ナリ、

由良家ノ元祖横瀬新六郎貞氏ト云ハ、新田義貞ノ三男、武藏守義宗ノ子男ナリ、義宗討死ノ時、家臣横瀬カ家ニ隠シ、生長ノ後横瀬カ家ヲ繼タリ、故ニ横瀬カ家ハ新田也ト云ハ、是由良家ノ説ナリ、然ルニ此説ハ後年ニ先後年月ヲ考テ、改メナクシタル説ナリ、最前ハ義貞ノ四男貞氏横瀬家ヲ繼ト云リ、此系傳來由リ、或人相考テ批判ス、由良家ニ是ヲ傳五聞年月遙ニ相違スルヲ吟味シテ、義宗ノ子ニ改タリト云ハ、其説ハ由良家ノ説ニ相違スルヲ吟味シテ、義宗ノ子ニ



門右大臣實能公行逢シテ侍隨身等走寄  
テ馬ヨリ打落セリ義國ノ郎從等安カラサル  
事ニ思ヒ彼御所ヲ焼拂ラヒシカハ此ノ事ニヨ  
リテ義國勅勤ヲ蒙リ下野国足利ノ別業  
ニ菴居シ仁平四年三月出家ス此年久壽ト  
改元アリ明シハ人壽二年六月卒ト見エタリ  
兩説トモニ疑キ事トモ無キニアラス其頃下野  
国人足利ト稱セシ者ハ藤原秀郷朝臣七代ノ  
孫成行ヲ足利太夫ト言シカ後ナリ成行カ子

太郎成綱早世其子孫太郎家綱祖父成行カ  
跡ヲ續ク家綱カ嫡子ヲハ太郎俊綱ト云宇治  
ノ先陣セシ又太郎忠綱カ父ナリ又俊綱カ  
弟二七郎有綱ト言アリ有綱カ男ヲ佐野太  
郎基綱ト云佐野太郎カ外ニ基綱ト言シ者  
不見基綱又足利ト稱セシ者ニモ非スシテ俊  
綱カ父ニ三甥ナレハ忠綱カ為ニハ從父兄弟ナリ  
忠綱治承二十七年ニテ宇治川ヲ渡シヌト云  
某カ從父兄弟成シ者モ其年齡推量スヘシ

細一作  
因

然リ其娘義國ニ相偶シタリト云ハ疑シキ事ノ  
甚ナリ亦久安六年ノ頃ホヒ實能ハ内大臣ニ  
テ在シ保元々年内大臣ヨリ直ニ左大臣ニ  
被成此殿ヨハ德大寺左大臣ト申ス大炊御門  
右大臣ト申セシハ實能ノ息男公能ノ御事  
ナリ其シモ久安六年ノ頃ハ正二位中納言  
ニテ在シタリ義國路次ニテ参リ合シ公能  
正二位中納言ノ時ノ事ニテ有シカト後ニ其  
事ヲ記スルニ及テ當時ノ稱ニヨリテ大炊御

門右大臣ト言シ歟然ラハ實能ト記セシハ傳寫  
ノ誤レリ公能ト記スヘキナリ某按ニ初義家  
陸奥ノ任終リシ後下野守タリシ事アリ公  
シハ其世ノ物トモニ下野前司ト記セシヲ見タリ  
其任ノ中ニ置レシ所ノ別業ノ足利郡ニ有  
シニ義國勅勸ヲ蒙リ都ノ住居心ニモ非レハ  
下リ住シテ終ラレシ成ヘシ其住居ニ付テ世ニハ  
足利式部太夫トモ加賀入道杯トモ稱セシト見エ  
タリ別業トハ其世ニ言シ在園ノ事ナリ

義重新田攝事

太系圖舊新刻本ヲ併セ見ルニ新田太郎母  
八前ノ上野公藤原ノ敦基ノ女九條院判官  
代左衛門尉從五位下大炊助法名上西建仁  
二年正月十四日卒六十八歳ト見エタリ初  
稱シテ新田太郎ト申セシ事ハ外祖敦基ハ  
明衡朝臣ノ男ニテ藤氏ノ儒家名譽有  
シ人ナリ其上野ノ任ニテ在シ時彼許ニテ  
長ト成ラシシカ義重建仁二年二六十八歳

ニテ被終レシト見エタリハ親父義國足利ニ下  
向ノ頃八年十六ノ時成ヘシ保元二年領家下  
文ニ新田ノ御庄ノ地主タルノ由見エシハ其外  
祖ノ別業ノ地ヲ讓リ受テシ事モ有シテ  
次ニ九條院判官代ト申セシ事ハ近衛院受  
禪ノ初久安六年四月法性寺關白忠通公  
長女八内有テ女御ト被成頓テ立后ノ宣旨  
有テ久壽二年ニ近衛院崩御ノ後御節ヲ  
下ロサル仁安三年ノ春院號ノ宣旨有テ九

條院ト申忝ラス、實ハ大政大臣伊通公ノ息女  
ナレトモ、法性寺殿ノ娘君ト被成シカハ、近衛  
基實ノ御夕メニ、御嬬ニテ在シタル也。此院  
ノ御領新田ノ庄ノ事ヲ、古キ物ニ新田ノ御庄ト見エシハ、  
只人ノ所領ニ非サルカ故ナリ  
基實預沙汰ニヨリテ、是ヲ共代ニ預  
所領杯ト言ヒ也保元二年三  
月、義重ヲ以テ、彼庄ノ下司職ニ被成シヤ。此  
敦基ノ外孫ナレ、夫等ノ所縁ノ事モ有シ  
成ヘシ。基實時ニ十五歳、正二位権大納言ニテ、左  
衛門督ヲ兼サセラシシカハ、義重モ亦左衛門尉

ニ補セラシ、彼御庄ヲ檢斷セラシシ程ヨリ、世ニ九  
條院判官代トハ稱セシナリ。此事猶下  
見エタリ其後叙爵シ  
テ、大炊助ニ被任シト見エタリ。此事世ウツリ  
事アラタマツテ、國ニ守護庄園ニ地頭ヲ被  
置シ、義重ニ及テ、又新田ノ庄ノ地頭職トハ被  
成シ、元久二年八月、義重ノ男義兼ヲ以テ、  
地頭職ニ被補シ時、新田ノ庄ノ住人等ニ被下  
シ文ニ可令任職早如本、以義兼為地頭職ト見  
エタリ。如元ノト言時ハ、義重ノ地頭タリシ事推

知ラレヌ

下文ニ新田ノ庄義兼地頭職可為如本ト見エタリ

義兼新田庄地頭職傳領之事

義重ノ男多カリシ中ニ義兼新田庄傳領ノ  
事、舎兄等其母賤シカリシ故ナリト言説ノ  
如ク然ルヘシトモ聞エス、東鑑ニ扱ルニ治承四年  
十二月、頼朝始メテ、鎌倉新造ノ館ニ移ラシ  
シ時、山名冠者義範前驅シ、此月又上西ノ孫、  
里見太郎義成京ヨリ馳参シテ、暁近ニ召加

エラシシ事見エタリ、世ニ言フ処ノ太郎義俊ハ  
既ニ世ヲ早クシ、三郎義範ハ猶冠者ノ頃ト見  
エタリ、文治元年八月、除日被行テ、源氏ノ武  
士受領六人ノ中、義範ヲ伊豆守ニ被成シ事、  
其注文ノ第一ニ配シ載ラレタリ、其後十九年  
ヲ經テ、義兼新田庄地頭職ニ補セラル、是ハ  
上西入道卒去三年ノ後ニアリ、末ノ代ニツクハ、  
其代ニ二国ノ受領ト一庄ノ下司ト、其高キ早  
キ、同ク論スヘカラス、増テ此比ノ受領ノ事ハ難



シテ難カリシ世ナリキ、總テ是等ノ事ハ其代  
ヲ以テ論スヘシ、世移リ事改メシル、後代ノ事ニ  
ハ准シ難キ事トモシメタルヘキ事ナリ、

義重息女之事

東鑑ニ見エシ義重ノ女、西心源太殿ノ後室ト云  
事故有ヘキ事ナリ、平治ニ義平ノ失セシトキ、  
義重ノ年廿五六歳ノ時ノ事ナリ、義平時ニ  
年十八九ノ由見エタリ、其妻年十四五成ニモ  
義重僅十歳計ノ時、儲ラシシ処ニヤ、イト覺東

ナシ思ニ其頃義平鎌倉ニ住セラシシカハ、新田ノ  
庄ヲ公ル事モ不相遠、義重モ素ヨリ同シ源  
氏ノ流ナリ、其女ノ長シク成ナシ後ニ可迎杯ト  
結ハシシ事ノ有シヲ、東鑑ニハ斯記セシモ知ス  
義平被矢シヨリ、壽永ノ初ニ至テハ、廿余年  
カ程モ又他ニ見エル事モ無テ居セシハ、古ニ聞  
エシ貞節ノ婦杯云者ノ如キ人ニモ有テ世ニ  
傳フル事無ハ惜ムヘキ事ナリ、

義純畠山ト被称ト言事

義純ノ祖父義康ハ義重ノ弟ナリ、鳥羽院ノ北  
面ニ侍ヒ、檢非違使ニ被成、叙爵シテ、陸奥權守  
トシ、兼シテハ、陸奥ノ判官ト被稱、保元ノ亂ニ太  
内ヲ守護シ、昇殿シ、被免、寄代ノ實、恩成ハ  
明レ、保元二年五月三十一歳ニテ卒ス、其子三  
郎義兼、頼朝ノ軍被起シ、初二御方シ、壽永  
ノ初、北條四郎時政カ、弟ニテ、女ヲ妻トス、文治元  
年八月、源氏受領ノ六人ノ其一人ニテ、上總介ニ  
任ス、難太平記ニ、此人實ハ、鎮西八郎為朝ノ子

成シテ、義康禊祿ノ上ヨリ、艱フ、世ニ憚リテ人  
隠シヌレハ、終ニ知ル人ナシト記セリ、其長ハ、尺余ニ  
テ、カ人ニ勝レシト、言傳シカハ、貞世朝臣ノ説空  
カルヘカラス、義純其長子ナリ、鎌倉大草紙ニハ、  
義純畠山重忠ノ妻女、并跡職ヲ賜、始テ源  
氏ニテ、畠山ト稱スト見、舊本大系圖ニハ、義純母  
ハ遊女、從立位下、遠江守義純其子三郎泰因、  
始テ畠山ト号ス、母ハ平時政カ女、畠山重忠後見  
ト見エ、新刻大系圖ニハ、足利太郎義純ハ義兼

ノ一男、永元四年十月十七日卒、年三十五、見ハ  
タリ、大草紙、舊本系圖等ノ説、深言傳ル処ト  
見エシカトモ、信難キ事共ナリ、其父義兼時  
政ノ女ヲ妻トセリ、重忠ノ後室、又時政ノ女ナリ、  
タトイ義純實ニ時政ノ外孫ニ非ストモ、其妻  
トセシ處ハ正ノ嫡母ノ妹ナリ、東鑑、永元四年  
五月ノ記ニ批ルニ、故畠山二郎重忠、後家  
所領掌所領等、日來有子細内、雖及改易、  
御沙汰不可有異事由、今日被仰出ト云云、重忠

元久二年六月、被殺、其後三年、則永元四年  
ニシテ、此年十月、義純三十五歳ニテ卒ス、若シ大  
草紙ニ見エシ処ノ如ク、重忠ノ後室、義純ノ妻  
ト成タラシニ、故畠山二郎重忠、後家ト稱スヘ  
カラス、若シ又其年五月ノ後ニ、彼後室ヲ、義  
純ニ賜タラシニ、僅ニ四月、五月ヲ隔テ、義純ハ  
卒シタリ、然ラハ三郎泰國ハ、其遺腹ノ子ニテ  
ヤ有ラニ思フニ、重忠ノ後室、夫ニ離シ子共矢テ  
便ナキ身ナリ、我姪ノ夫、義兼ノ孫ナシハ、泰國

ヲ取テ艱ヒ、自領掌スル所領ノ地ヲ讓リ與エ  
タレ、泰國始テ畠山ト稱セシメ、斯世ニ傳エケル  
モ知ルヘカラス、長樂寺藏系圖ニ、義純ノ妻、新  
田藏人義兼ノ女、岩松女子ト稱シテ、時兼、時明、  
二人ノ男ヲ生ムト見エ、二人ノ弟、泰國カ母ノ事、  
時政ノ女タル由ハ見エス。

時兼岩松ト稱スル事

建保嘉祿ノ年間、鎌倉殿ノ下文ニ拠ルニ、建保  
三年三月、故新田藏人義兼ノ後室亡夫ノ讓

状ニ任セテ、新田ノ庄ノ内、岩松下、今居田中三箇郷地  
頭職ニ補セラシ、此日又彼後室ニ所進ノ注文ニ依テ、  
外孫源時兼ヲ以テ、新田庄内十二ヶ郷ノ地頭職  
ニ補セラレ、時兼ハ足利遠江守義純ノ長男、母ハ新田  
藏人義兼ノ女ナリ、其後九年、元仁改元ノ年、正  
月、義兼後室ノ庄公、岩松郷并春原庄内萬吉  
郷ヲ以テ、時兼ニ讓附ス、其後嘉祿二年九月、其外  
祖母ノ讓状ニ任セテ、時兼ヲ以テ、岩松郷ノ地頭職ニ  
補任セラレ、是ニ拠テ見ル時ハ、足利ノ流合シテ、岩松ト

稱スル事、時兼ノ代ニ始シリ、

岩松亦新田ト稱スル事、

上西入道ノ四男、新田次郎義季、

觀應年中、尊氏將軍袖判トシテ賜シ、長樂寺寺領  
目錄ニ、新田次郎義季、法名栄勇ト見エタリ、東  
鑑ニ、得川三郎トモ、得江三郎トモ見エ、二ノ字誤  
写シテ、三トナルカ、

二人ノ男アリ、長男ハ新田下野前司頼有、

又江田下野前司トモ見エ、新田下野前司ト記セシ古文  
書ハ二通迄見エタリ、

次男ハ新田三河前司頼氏、

此人ノ事、東鑑寛元宝治ノ間筆ヲ絶ス見エテ、其後ハ見エス、  
長樂寺藏ノ系圖ニ、文永中、佐渡ニ配流ノ由見エタリ、長

キニ付略ス、

此流テ、徳河ト稱ス、亦得河ニ作ル、徳河江田等ノ地、

分テ讓ラレシ故ナルヘシ、頼有ノ男頼春、新田下

野三郎ト稱ス、女子ハ時兼ノ五男、岩松五郎経兼

ノ妻トシ、頼有ノ所領、新田庄内、徳河横瀬下

江田、但馬国上三沼庄、相摸国永用郷等ノ地

ヲ分ケテ、其女子ニ被讓、文永五年五月、其季

生処ノ子、亀王丸ヲ養テ、初其母分テ讓リ、地

以テ、亀王丸ニ傳エ讓リテ、新田下野太郎政経

ト称セシム此事大草此流岩松ト称シ新田ト称ス事  
是ヨリ始レリ

岩松ニ禮部京兆之西流アル事

新田下野太郎政経ニ多ノ男有ト見エタリ長樂

寺藏系圖ニ見エタル處ハ長男義政次本空次

禪師次四郎次経家其下ニ任シテ兵部大夫

建武二年七月廿二日於女景兄弟三人討死

争ト記シタリ系圖ニ漏レ猶有ニヤ其力中岩

松兵衛藏人義正岩松禪師頼宥岩松三郎経

家又氏部少輔岩松治部太輔直國四人ノ事ハ太平

記ニモ見エタリ鎌倉大草紙ニ記ルハ政経ノ

一男岩松兵部太輔経家建武二年七月戦死

其弟新田岩松治部太輔直國ハ後ニ將軍方

トナリ鎌倉基氏ノ近臣ニテ武列岩殿山ノ戦

ニ忠ヲ盡シケリト見エタリ直國ノ事長樂寺

藏ノ系圖ニ漏レヌト見エタレトモ太平記大草

紙等ニ見エシ處不可疑後ニ直國ノ流ヲ禮

部家トシ経家ノ流ヲ京兆家トス今試ニ天

草紙又、京兆家古文書等ニ見エシ所ニ拠テ、  
其系ヲ分ツ

政經

賴賢入道

經家

三郎兵部太師

直国

持国

満国

満純

泰家

三郎兵部太師  
法名法松

某

左馬助  
法名法泉

満長

伊豫守

満春

能登守

持国

右京大夫  
左京大夫  
實満春子  
童名吉甫亮

家純

直国ヨリ家純ニ至ル五代ノ御事ハ、不及記スルニ

應永三十五年七月、岩松伊豫守満長代ニ成次  
申状曰、右地者為先代泰家法師ノ跡以綸旨  
并領ノ間、最實ニ他ノ者也。又曰、曾祖父兵部  
大輔經家、并新田義貞為兩大将、自令退治以  
來、御代于今泰平也。此文ニ拠ルニ、經家ハ、満長  
ノ曾祖ニテ、満長ハ、經家ノ曾孫ナリ。泰家法  
師ト云、建武三年六月九日、直義御教書ニ、  
岩松三郎殿ト見エタリ。其年月日、共ニ經家  
討死ノ後ノ事ナリ。尊氏  
御教書ニ、十二月十一日、兵部太師殿ト見エシハ、

兵部入道法松ノ事ナリ又應永廿六年二月  
法泉上野國ノ新田ノ庄并國々本領等ヲ以  
土用安丸ニ讓渡ス状ニ曰自亡父法松得讓  
所々文書在之又曰仍雖爲孫依有志法泉一  
跡爲惣領藏所定也土用安丸若輩之間親  
父能登守於公方可致代官云云土用安丸ト  
ハ持國力童名ナリ亡父法松ト言ハ成次申狀ニ  
見エシ泰家法師也鎌倉名大草紙ニ岩松治部少輔入道法松  
ト見エシ兵部ヲ治部ニ作ル傳寫ノ訛ト見ヘク  
法泉名見ル処口非ス此人泰家ノ子ニテ應永

十八年五月下知狀岩松左馬助入道殿ト見エシ  
是ナリ親父能登守ト云ハ正長三年十月ノ申  
狀ニ岩松土用安丸滿春前ニ見エシ於公方可致  
代官ト言シモ是ナリ併テ是ヲ見ルニ左馬助入  
道法泉其嫡子伊豫守滿長ニ男子無シカハ次男  
能登守滿春カ子土用安丸ヲ嫡孫トス其後應  
永廿年五月鎌倉ノ持氏常陸之小栗孫壽  
平滿重ヲ追討ノ事ノ爲ニ東國ノ軍勢馳向  
ニ及ヒ滿長モ又讓狀ヲ記シテ土用安丸ニ授應永



應永世年五月廿八日、滿長ト記セシ讓状是ナリ  
滿長此戦ニ恙ナカリシニヤ、同世五年七月、滿長代  
成次カ申状アリ、此年正長ト改元アリ、今年十月、  
土用安丸代滿春申状有ニ扱シ、滿長此年卒  
セシカ、正長元ヲ、ニト記セシ、傳寫ノ誤レリ、唯  
一年ニテ、永亨ト改元也、正長三年、無土用安丸成人ノ後、右  
京大夫持国ト申テ、古河成氏ノ方人ナリ、其子ニ  
人アリ、二郎三郎是ナリ、長祿中、京都ニ纏セシ  
時、京ノ管領細川勝元、右京大夫ナシ、改テ左京太  
夫ニ任ス、二郎後ニ左京亮ト言シモ、亦改テ宮内

少輔ト申セシト見エタリ、長祿ノ後ノ事未考、  
永祿九年十年ノ間、本領ヲ失シト見タリ、新田  
宮内少輔ト言シ者、永祿十年七月甲斐ノ武田ニ  
降リテ、後閑伊勢守ト改メ称ス、其子初ハ上條  
善次郎ト称シ、後ニ宮内少輔ト改テ、天正中、相摸  
ノ北條ニ随テ、亦改テ後閑宮内少輔ト言、其子  
ヲ後閑刑部少輔ト申キ、長祿三年ノ後、永祿十  
年ニ至テ、凡九十年、其間ノ事不詳、  
朝臣ノ物ナリト云、  
扇ヲハ見タリキ、  
後閑ノ家ニ傳レ所  
ニ引兩ノ旗、義家

直国新田伊豫守跡ヲ領セシ事

貞治三年十月ノ下ニ文ニ義教將軍ノ仰ヲ以新田伊豫守跡ヲ直国ニ賜ル由木戸左近將監カ名附ノ事アリ

貞治三年十一月九日ノ下知狀ニ上野国新田

庄内江田郷ノ事新田伊豫守跡可被沙汰付之由見上

同廿日ノ請文ニ任太月廿八日御下文今月九日

施行之由見上ヨリ高野山寶恒院藏南朝

記ニ貞治三年七月上野国世良田伊豫守義

政謀叛ノ事ニヨリテ鎌倉左兵衛督基氏

軍勢カラ差向ラル同月廿八日義政如來堂於

テ自害スト見上テ櫻雲記ニ見上テ亦是

ニ同シ世良田長樂寺藏延文四年四月義政代

相傳ノ領後閑三木邑ノ内等寄附スルノ長

樂寺狀ニ散位源義政ト記シ貞治四年七月長

樂寺住持了宗記セシ寺領目錄ニモ地頭義政寄

進ノ地ノ事載セタリ延文四年ヨリ貞治四年ニ至

テ僅ニ五年ヲ隔其頃義政世良田ノ地頭タシ南

朝記ニ世良田伊豫守ト稱シ鎌倉下文寺ニ其

家號ニヨリテ新田伊豫守ト稱セシナリ

此新田伊豫守事ヲ或説云義貞戦死ノ後世良田城代ノ子  
十三ニナル者基氏ニ昵近シ新田四郎義一ト稱シ後ニ伊豫守ニ  
ナカレ武藏ノ芳賀合戦ノ時廿一歳ニテ戦死セシ由言アリ心得  
ラシス義貞朝臣ノ死セシハ延元ノ二年ナリ芳賀合戦ハ貞  
治二年ナリ相去事廿七年ナリ延元二十歳ナラシ者此時分  
ニ至テハ三十九歳ナリ廿一ハ義一ト言シ者ハ基氏ヨリ八十  
五歳ノ年兄ニヤ基氏ハ廿八歳ニテ貞治六年ノ四月卒セラ  
レキ太平記ニ木戸兵庫助毎氏ト言者芳賀合戦ニ死セ  
シ事ヲ誤傳シ事ト見ヘタリ義一ハ義貞ノ城代新田上  
野今カ子ト云々此上野今系圖不知

### 源慶其家ヲ中興之事

鎌倉大草紙ニ見エシ所ハ禪秀亡シ後天用ハ禪  
秀カ殘黨ヲ集上野ノ国岩松ニ蜂起シケルヲ  
舞木宮内亟馳向合戦シ散ニ追散シ生捕トモ

シテ鎌倉ニ奉リケレハ五月十三日龍口ニテ誅  
セラシト記セリ南朝記ニ見エシ所モ是ニ同シ  
テ息宗純ハ行方知ラス落行後新田岩松三河  
守宗純ト云ルハ是ナリト記セリ松陰私語ニ見  
エシ所ト同シカラヌ松陰ノ記セシ所ハ五月十三日  
於藤澤道場天用生害ノ事アリ是年十二月  
廿日ノ夜源慶猶幼少ニシテ長樂寺萬像庵ニ  
忍來十八歳ニ成シ時義教將軍持氏退治事  
思召立ニヨリテ源慶ヲ召出シ還俗サセ新田次

郎長純ト被召京都三管領以下諸大名代官  
ヲ以テ元服ノ事ヲ被賀其後長純斯波武衛  
ト大將ヲ奉リテ下向ノ由見エタリ結城戰場ノ  
時ノ事ヲ言成ヘシ天用亡シ事ハ應永廿二年  
ナリ結城戰場ノ事ハ夫ヨリシテ後廿四年ニ當  
レリサハ源慶還俗ノ事ハ義教家ヲ受継ヒ  
初ノ事ト見エタリ新田三河守宗純芳野殿ニ  
参内セシト言事南帝ノ記ニ見エシト言説ノ如キ  
最然ルヘカラス櫻雲記ニ天用ノ子後ニ新田岩松

三河守宗純ト言是ナリト見エシ事ヲ傳エ誤テ  
南朝ニ参シリ杯ト言成ヘシ松陰記セシ処必誤ル  
ヘカラス宗純ト記セシハ家純ノ字ヲ誤寫セシ事  
疑フヘカラス 櫻雲記ハ南朝ノ事ヲ記セシ物ナリ

横瀬岩松ノ家人ト成シ始ノ事

古キ猪股黨ノ系譜ニ拠ルニ横瀬元武藏黨ノ者ト  
見エタリ鎌倉大草紙ニ拠ル時ハ横瀬岩松家人ト  
成シ事ノ始ハ持氏亡ヒ給ヒ源慶其家ヲ中興ハ後  
ノ事ノ如見エタリ大草紙ニ應永廿三年十月禪

秀カ亂ニ同キ十二月、岩松治部太輔、本名ナリトテ新  
田ニ成カエリ、館林辺ヘ計テ出国中過半随エケルニ  
由良横瀬長尾等持氏ノ味方トシテ、同月十八日、  
岩松ト合戦シ、岩松家老金井新左衛門討死シ、  
岩松引退、同廿一日、岩松猶多勢ニテ、押寄シニ  
横瀬長尾勝誇タル折柄十六、頓テ押寄せ、残  
ラス追散タリト見エタリ、サラハ頃日迄ハ由良横  
瀬ノ者トモ、岩松ノ家人ニ非ラス、松陰私語ニ横  
瀬信濃守国藝ハ小野篁十九代ノ後胤ニテ、

岩松代々ノ家人ノ由見エシ如何可有、湘山星移録ニ岩  
松殿ノ御家風、余リニ忠ニ誇リ、国人去人ニ緩怠  
有ニヨリテ、曆國中九十日ト申ハ、持氏御再興  
ソシトモ見エタシ、横瀬元岩松ノ家人タルカ、禪秀  
カ乱ノ時ニ心替シテ、其主成岩松ト戦シニヤ、若然  
ラハ横瀬カ家其主ニ叛シ事、昌純代ノ事ノニ成  
云ヘカラス

新田西谷同シ流ノ事

新田藏人義兼ノ孫太郎政義、足利左馬頭義

氏ノ女ヲ妻トシ、五人ノ子ヲ生、其嫡男又太郎政  
氏ニ男子七人アリ、其三男重氏ヲ、西谷九郎ト  
称シ、義貞朝臣ノ親父、朝兼ノ舎兄ナリト、其  
事長樂寺藏系圖ニ見エタリ、松陰私語ニ岩松  
家、年始梳飯ノ座次等ヲ記シテ、相伴ノ衆、  
左ハ新野西谷ヲ始トシ、右ハ澁河田中ヲ始トス  
ト見エシモ、是等元一族長者タルカ故ト見エタ  
リ。

大光ト言ヒ上杉房顯ノ事ナル事

鎌倉大草紙ニ寛正七年二月十日、山内兵部少輔  
房顯、五十子ノ陣中ニテ早世ス、法名大光院清岳  
道純ト申ト見ヘ、家純右京大夫ニ贈リシ書ニ、庄内  
大光御知行ノ地ト見エ、国蔡伊丹修理亮ニ答シ  
書ニ、庄内所ノ事、大光様御知行分ト見エシハ、  
房顯故管領ニシテ、當時東国ノ人ニ敬思タリシ  
カ故ナリ、越後上野武藏ノ国ニ有処ノ山内所  
領ノ地、等テ算フヘカラス、此比、安房ト伊豆  
ト他家ノ所領ト成庄内ト新  
田庄ノ内ニ有所ラ言シト見エタリ、

已上十三條新井筑後守殿考也

追考

新田岩松之傳裔來由之撰作ニ御所存加言  
可賜ト其草案被送ニ付右之十三條ノ私考  
ヲ書記シ且又所存ノ赴ヲ云々

新田称號ヲ重ニセラシ候ニ付上西入道ヨリ被初  
候ト相見ヘ候其序文ニモ其赴ヲ被載然ラハ  
義国ノ一段前書ノ如ニ或ハ一字ヲ引下ケテ

可被記置事歟又ハ上西條下ニ附録セラシ候テ  
モ可然歟サテ義国足利ト被称候事先師  
考証ノ條分明ニ相聞候然レ注ノ一説ヲ本文  
ニ被記足利太郎基綱ノ事ヲ注ニ載セラシ  
可然カ第一ニ康和三年ニ佐竹追討ノ大将  
トシテ十三歳ニテ開東下向ト申事心得カ  
タク候足利太郎カ宿所ニ下着シ其女ニ相見シ  
三男子ヲ生ト見上テ其一男義重母ハ上野ノ  
敦基ノ女ト云一若シ亦義国開東下向ノ前

義重ヲ生ト言ニ六十三歳ヨリ前敦基ノ女ヲ  
娶義重ヲ生シカ最不審ト言ヘシ是ニツ義重  
ハ建仁二年ニ六十八歳ニテ被卒シト見エタリ  
是ヨリ上ヘ推シ買フニ義重保延元年ニ生レ  
康和二年ヨリ保延迄ハ三十五年ヲ隔ツ是ニ  
又義重ノ弟義康ニ保元二年ニ三十一歳ニ  
テ卒ト云然ラハ大治二年ニ生レシ人カ大治二年  
ヨリ保延元年迄ハ中間七年アリサラハ義康ハ  
義重ヨリハ八歳ノ兄ナリ總テ是等ノ事可

疑コト最多シ世既ニ遠ク成テ史書ノ記ス處其  
年月壽數ノ如キハ多拠所トスルニ足ラズ唯其  
中實ニ近キ物ヲ採リ擇ヘキ事ナリ義國ノ事ノ  
如初上野ノ敦基ノ女ヲ娶テ義重ヲ生義重  
外祖ノ許ニ被養テ上野ニ有シテ其縁ニヨツテ  
後ニ新田庄ノ下司職可成叔二男季邦ハ早世  
三男義康ハ季子ニテ義國ノ晩年足利ノ別  
業ニ被引養シ時モ附從ヒ義國被卒シ後ニ其  
跡ヲ受継足利ト稱セシ成ヘシ義康ノ母ハ足利



太郎基綱カ女臣言也ト記シ被置候ハ後人ハ  
惑モ有レシキ歟

左馬助満国ト左京大夫持国ト兩家分レシ事其  
証拠不明ヲカ雖今試ニ其系ヲ分タハ

經家

兵部太師

直国

治部太師  
法松

満国

左馬助  
法泉

某

治部太師

某

満純

治部太師  
天用安茂宗子

満長

伊豫守

家純

同上  
源慶院道健

満春

能登守

持国

右京大夫 左京大夫  
土用安丸

註重曰満純大掛入道カ謀叛ニ組シテ討死夫ヨリ廿年  
余満国ノ家ヲ相續ノ者無ヲ以テ満国カ嫡孫ナレ能  
登守満春カ子土用安丸ヲ以テ家ヲ立シム正木カ方ヲ  
二百通余ノ文署ノ内ニ満国ヨリ嫡孫土用安丸ニ讓ノ  
書ヲ證據トス是持国ナリ満国カ実ニ嫡孫ナルヲ以テ  
持国ト国ノ字モ付又満国ニ女子有テ從弟ナレ満春  
ト夫婦ニセシメ置ヲ以テ其腹ニ出生ノ持国ナレ嫡  
孫ニ無レ紛ニ付満純討死ノ後ノ子トス持国ニ満純カ  
跡ノ相父満国カ讓ヲ受二十年余是ヲ領ス然ルニ  
満純カ幼息家純成長シテ後年結城合戦ノ切ヲ以  
將軍ヨリ又満純カ謀叛ニ組シ討死ニ付所帶没収ノ  
關所ヲ賜家興シタリ然レ始メ満国カ所領ノ外ニ子  
満純カ領分有テ是ヲ先年ノ關所ト成レ所成  
ヘシ持国後年ハ祖父満国カ讓與ノ地ヲ以テ別家  
ヲ立子孫是ヲ相續シ右京大夫ナレ京兆家ト唱家



法泉天用若實父子歎又、其子ニテモ既ニ家  
督悉讓タラシニ、應永廿四年ノ乱後、法泉安  
穩不可成、シテ土用安丸ニ讓處ノ領地モ不可  
有大草紙ニ見エシ處モ、治部太補直国、其子左  
馬頭持国、其子治部太補早世シ、今ノ天用  
其跡ヲ繼ト記セリ、是又天用名跡計ヲ繼  
シト言事ト見エ、左馬頭持国ハ左馬助滿国  
ヲ誤記セシ成ヘシ如斯ナシ、應永廿三年ノ申  
状ニ曾祖父經家ト言シモ、滿長ノ曾祖父ル事

疑ナシ又法泉ノ謀狀ニ親父能登守ト記セシ  
モ、實ノ子ト孫ナラシニ、親父トハ言フシキ事ナリ、  
能登守ハ法泉ノ甥ニテ、其子ヲ養シカ故ニ土用  
安丸ニ對シテ、其父ノ事ヲ親父ト言シナルハ、  
是等ヲ併セ按スルニ、初兵部太補經家迄ハ義  
貞ト共ニ官軍ニ属セシ、其子真国將軍方成、  
管領基氏ニ随ヒ、戦功アリ、新田岩松ノ惣領ト  
ナリ、其子滿国ニ傳シ、滿国ノ嫡子早世シ、養子滿  
純、名跡ヲ繼受スリシカ、禪秀カ亂ニ與シテ、天用

ノ家滅シ又依テ満国姪孫ヲ取テ家督トシ其後  
相統テ京兆ノ家興リ又叔天用ノ子家純ハ後ニ  
義教將軍ノ命ヲ受結城戰場ニ切アリシガ將  
軍ヨリ新田庄ノ闕所ヲ賜リ治部少輔任  
礼部家再起リト見ユク

家純

明純

丹生太郎

兵庫頭

家純子

顯純

憲純

尚純

二郎  
治部太輔

治部太輔

附録ニ見ヘシ處如此

明純ハ父家純ト不和ナルカ故ニ出奔スト云然ラ其  
子顯純ヲ家督トセラルヘキニ曾孫ヲ以家督トセ  
ルシ事不審若ク顯純ト言シモ早世セシヤ然  
ラ顯純卒太ノ日先尚純ヲ立ラシヘキニ憲純  
ヲ被立シモ嫡流ヲ重スト言儀カ且家純現存ノ  
間ニ子孫曾孫三世皆早世セシ事モ少ハ心得難  
シ又明純顯純ト皆クアキスノ訓ナリ但家傳  
別訓有シ事歟若別訓無ラニハ父子ノ各訓ノ  
同キ最不審ナリ疑ラクハ

家純

明純

丹生太郎  
兵庫頭

憲純

治部太輔

尚純

二郎  
治部太輔

明純初丹生太郎ト云後ニ兵庫頭ニ任シ末治部太輔  
ト云ル内ニ出奔セシカ其子憲純ヲ立テ治部太輔ニ任セ  
シ是モ早世シテ家純ノ二男尚純ヲ被立シト云事  
カ明ノ字顯ノ字ニ又書シシ故ニ誤テ父子二人ト云セ  
カ同訓異事ヲ適用セシ事故例甚多シ但家

系ノ如尚純ハ明純ノ二男ニテ憲純ノ弟成シテ憲  
純ノ没後ニ家督ト被定シテ

又

新田義重左衛門督家政所下文ニ基實家政所  
ト見ヘ候義重以時左衛門尉ニテ世ニ判官代ト  
申ハ以下司職ノ事成歟搃シテ庄園ノ事ニ條々  
事長子細ニテ品々盡シ難シ其頃左衛門督公卿  
神任ニ見上シ處ハ

保元元年

權中納言正三位

藤忠雅

左兵衛督檢非違使別當  
九月十七日轉左衛門督

藤基實

正月二十九日任兼左衛門督  
九月十三日任權大納言

保元二年

權大納言正二位

藤基實

左衛門督正月廿四日叙正位  
八月十九日任右大臣  
十二月十七日兼皇太子傳

中納言正三位

藤忠雅

左衛門督檢非違使別當  
三月日辞退

基實トハ近衛殿ノ事ニ候忠雅トハ花山院殿ノ事ニ

候花山院殿モ大臣家勿論ニ候惣シテ攝家大臣

家ニ政所ヲ被置タル事ナリ左衛門督家政所下

スト有之候ヘハ新田庄ノ領家ハ近衛家ニ候ヤラシ

花山院家候ヤラシ未考候神任右ニ記ス通ナリ

其月附ケニテ知可申候昔ハ庄園ノ事或ハ院

ノ御領又公卿ノ領又ハ寺領杯其所録ニ付下司

職ヲ補セラシテ庄司杯ト申タル事ニ候地下ヨリ

開發シテ庄号ヲ奏シ請候勅許ノ事モ勿論ニ

候

義重ヨリ義兼江御讓與狀ト候ハ則元久二年

八月、鎌倉政所ノ下文ニ候十二卿ノ事ト見ヘ候  
義貞ノ家臣傳領ノ所ト、此外タル勿論ニ候  
ニタアキト有之候ハ傳寫ノ誤ト見上候新田庄ニ  
テ候嘉祿二年九月下文袒母尼ト有之候此事ニ  
候<sup>アキ</sup>ト有之ヲ<sup>アキ</sup>ト字誤タル候  
額戸ハカウトト讀ト見ヘ候帽額又曾ノ<sup>イカ</sup>額ノ  
如キ皆々カウト讀ム事ニ候本領目錄ニカウトト  
見ヘ候是ニテ候

月疑年

成氏ノ書ハ皆々康正元年二年ノ二月ノ事ニ候

傍注、享德四、享德五ト有之候ハ其事ニ候、享德  
三年十二月ニ成氏上杉管領ヲ被誅依之關東  
大亂ニ成候、扱享德四年改元ニテ、康正ニ成候ヘ  
トモ、亂中ニテ、成氏ノ方ヘ、改元ノ沙汰不聞内ノ  
旁注ト相見上、結々殊勝ノ事、實祿ト被存候  
又成氏ノ書、閏正月、閏六月、杯ト書付事見ヘ候  
ハ似タル字ヲ誤寫シタルニ候、閏ハ享德四年ノ四月ノ  
事ニ候、閏四月ト可有事ニ候  
康正三年、改元長祿ト申ス、長祿元年六月、澁

川義鏡武州へ下向ナリ十二月政知豆州へ下向ナリ  
依之長祿二年ヨリ右京大夫ヲ御方トノ事ニ  
候二年九月右京大夫政知ニ被与セ三年ニ左京大  
夫ニ改候八京ノ管領細川勝元右京大夫タル故  
ト見上候二郎モ此時宮内少輔ニ叙任ト見上  
大光御領ノ事松陰私語ニモ大光院御名代ト  
申事見上候キ是ハ上杉ノ管領兵部少輔房頭  
ノ事ニ候享德四年正月ニ成氏ノ夕メニ戦死ス大  
光院殿道純ト改名ス上野国ヲ知行候ハ勿論候

又鑊倉大草紙ニ候岩松家ノ次第

義純 經兼

政經 經家 岩松兵部太輔

直国 岩松治部太輔

持国 右馬頭 治部太輔 早世

治部太輔入道天用 滿純事

是ニテハ直国ヨリ滿純迄ノ間一代多様ニ見上候  
惣シテ文書等傳來ノ写誤リ多シ且年ト月トノ前  
後特ニ多紛レ候ハ見ニクキ其御心得ヲ以御吟味可有候  
已上



後閑家文書之中抄録

急度深自筆候仍南栗林之内三百俵之分新  
田宮内少輔殿進候就之自身其地江御越候  
彼仁之事不私高家ト云又武辺等無二心懸  
御方之條則懇切申候有其意得無疎意馳走  
可被申候就中栗林之内配分之摸様者畢竟市  
川十郎右衛門可被談合候無効之損亡又新宮モ德  
分候様以所度可被相調候右之赴能々市十内  
談專一候忠惶謹言

猶新田殿ハ無疎畧可被致指南候

九月廿九日

信玄判

工藤源左衛門尉殿

是ヲ按スルニ此書新田宮内少輔始テ武田家ハ隨  
時ノ事ト見ヘタリ年號見ヘス永祿ノ初欵此次新  
田新田宮内少輔ヨリノ起請文見ヘタリ是モ年  
号ノ事ハ見ヘス故ニ略之

近年在府候之間本領安堵之儀雖可申付候以  
先忠小幡知行候之間無是非候因茲後閑ヲ進

置候可致勤相當之軍役候事所要候恐々謹

言

永祿十年丁卯六月廿七日

信玄

後閑伊勢守殿

是ヲ按スルニ新田改メテ後閑ト稱セシ始ハ信玄ノ此判

ニ拠シト見ヘタリ、工藤ノ狀ニ新田宮内少輔殿ト見ヘ

是等ハ伊勢守殿ト見ヘ

宮内少輔後ハ伊勢守ト改シヤ、但伊勢守ハ宮内少輔

ノ子タルヤ詳成事ヲ不知何ニ新田ヲ改テ後閑ト稱セ

シ、永祿十年ノ事也又新田本領ヲ武田為ニ失シ如ニ

モ見ヘタリ、其知ハ小幡宛行シト見ヘシカ故ナリ、

信濃國小縣郡下ノ御諏方社、上信之諸士對武田信玄起請文之内後閑伊勢守信純トアリ、永祿十年八月之事也

軍役之事

一十五騎、鎗六十本、此内可有被鉄放之事、付持小

幡十本、此外シナイ指物有ヘシ

一十五騎之持鎗、可為六十本之内候事

一自當年來歲九月己前者七騎、鎗三十本之

事

付此内可有被鐵放、又七騎之鎗、可為三十本之内

已上

信玄朱印

永祿十年丁卯七月朔日

後閑伊勢守殿

是ヲ按スルニ後閑ノ地ヲ宛行ニヨリテ一時ニ軍役ノ  
定ヲ被出シト見ヘタリ

定

任聽松軒讓與之旨後閑之内六百四十八貫文進  
之候畢竟軍役等嚴重可有勤仕候猶依忠節  
戰切御身躰涯分可引立者也仍如件

天正七年己卯卯月三日

勝頼

上条善次郎殿

是ヲ按スルニ聽松軒トハ伊勢守事カ此善次郎ハ子カ  
弟カ上条ト改称セシ事不詳

定

一高林之郷

五百貫文一岩松之郷

五百貫文

一高島之郷

三百貫文

右如此為舊領之由候之間東上州本意之上速可進  
置之候弥可被勵忠勤儀可為肝要候恐々謹言  
追而先判所持之人又難去以忠節右之地他人正出置  
候者以替地可補候也

天正八年庚辰正月廿日

勝頼

上条宮内少輔殿

是ヲ按スルニ善次郎事カ又惣領職ノ人ハ不詳  
御本領之儀者武田家之砌相違以來小幡拍束

候条無是非候然間永祿十年丁卯武田信玄  
被申合候後閑之儀進置候相當之軍役嚴  
重之儀可然候自今以後武田別而於御稽  
有涯介引立可懇切申候恐謹言

天正十一年癸未正月十一日 氏直

後閑宮内少輔殿

是ヲ按スルニ武田亡之後北条家ニ随ヒ時所領安堵  
ノ状ト見ヘタリ此宮内少輔元上条ト称ヒ人ナラ  
五日之内可令出馬候早ク有御支度來セ

利根川端可有御忝陣候仍如件

七月十五日 北條家虎朱印

後閑宮内大輔殿  
後閑刑部少輔殿

是ヲ按スルニ年号不見ハ不詳宮内刑部ト二人並  
シ始ナリ此後ノ諸文書ニ皆々氏直ヨリ宮内  
大輔ヘノ物多シ別事ナキニ附略之畢氏直ヨリ  
小田原陣ノ時宮内方ヘノ兩通モ次ニ相見ヘ候右  
之略文書ハ先年古文書ノ傍ニテ見ヘ候時写シ  
留シ物ニ候今度後閑家ノ系圖熟覽仕是等

上列ニ後開ト云地ニ所  
在ニ廿津郡ニテ小幡  
ノ西ニ碓氷郡ニテ松井  
田ノ北也伊勢守カ領セシ  
碓氷郡ノ後開成ヘシ

ト考合候ニ系圖ノ詞書符合スル事モナク不審  
ノ事ニ候トカク甲州ヨリ、後開ノ地ヲ被宛行  
シヨリ、後開ト改称シ、其後又上条氏被称事カ  
ト見ヘタリ、當時モ後開ト申地、定テ可有之候  
橋ノ辺カ、何レノ郡ニ属シ候ヤラシ、此流ハ如何ニモ京  
兆家ニテ、永禄ノ初年、本領ヲ被矢ト見候、  
彼本領ハ甲州ヨリ、小幡ニ被宛行シト見ヘテ、  
甲州ノ為ニ本領ヲ失ヒ降参ノ事ニ候ヒシカ、  
又北条家ノ為ニ本領ヲ失候テ、甲州ヘ降参シ

又其後北條ニ属セラシ候ヤラシ、後開ノ地マテ  
被矢シハ、慥ニ天正十八年、北條亡シ時ノ事共  
見ヘ候、正木家ニ候古文書ノ終ト、永禄ノ初年  
迄トノ間ハ、三四代程ノ間ニモ可有之ヤラシ、重テ  
可考。

西上野寺尾地ノ郡、何所寺ノ名如何、秋元成  
瀬ト同道、月齋家号、矣念



